

## 中国電影大観



# ラスト、コーション(色、戒 / LUST, CAUTION)

2008(平成20)年1月17日鑑賞(東宝試写室)

監督・製作＝李安<sup>アン・リー</sup> / 原作＝張愛玲<sup>アイリーン・チャン</sup>『ラスト、コーション』(集英社文庫刊) / 出演＝梁朝偉<sup>トニー・レオン</sup> / 湯唯<sup>タン・ウェイ</sup> / 王力宏<sup>ワン・リホン</sup> / 陳冲<sup>チェン・チュン</sup> / 庾宗華<sup>ユ・ツンファ</sup> / 錢嘉樂<sup>チン・カニョク</sup> / 朱芷瑩<sup>チュ・チーイ</sup> / 柯宇綸<sup>コ・ユン</sup> / 高英軒<sup>コウ・エイシュン</sup> / 阮德鏘<sup>ワン・タクシヤン</sup> (ワイズポリシー配給 / 2007年アメリカ、中国、台湾、香港合作映画 / 158分)

### 第4章

日本と中国の浅からぬ縁

……『ブロークバック・マウンテン』(05年)に続いて、ベネチア国際映画祭で金獅子賞を受賞した超話題作がついに公開！ タイトルの意味を考え、本番まがいの、激しくかつバリエーション豊かなセックスシーンに仰天しながら味わう中、あなたが到達する結論とは……？ 日中戦争を背景とし、「東洋の摩天楼」と呼ばれた1940年代の上海を舞台に展開されるスパイたちの人間ドラマは、見応え十分。すると、当然アカデミー賞も射程圏に……？

## 🎬 やっと、あの話題作を！

2007年の第64回ベネチア国際映画祭で金獅子賞(グランプリ)と金のオッゼラ賞(撮影賞)を受賞した李安<sup>アン・リー</sup>監督の『ラスト、コーション』は、私が1日も早く観たいと思っていた作品。台湾のアカデミー賞である第44回金馬奨では、この作品は最優秀作品賞、最優秀監督賞等全7部門で最優秀賞を受賞したことは、『キネマ旬報』1月下旬号でよく知っていた。また年末年始を上海の司法試験用の学校で勉強していた中国の友人からも、ネットでこの映画を観たが、中国ではこの映画の話題でもちきりになっているとの情報も得ていた。もっとも、この映画は日本ではR-18指定とされていることからわかるように、激しいセックスシーンが見モノの1つだから、中国本土で公開されるについてはこの部分が大幅に修正されているため、わざわざ香港まで無修正版の鑑賞に赴く中国人も多いとか……。

『キネマ旬報』1月下旬号で10頁にわたる特集を組んだ、そんな話題作をやっと本

日の試写室で観ることに。

## まずはタイトルの勉強から

アホバカバラエティーがくだらないのは、一瞬の笑いでうさ晴らしはできても、その後頭の中には何も残らず、人間がどんどんバカになっていくばかりだから……？ それに比べると、すばらしい映画は心が感動するだけではなく、そこで学んだことが知識として頭の中にいっぱい残ることになる。その意味では、映画もただ素通りするのではなく、勉強することが必要。特にこの映画のように歴史的背景のあるものや、ワケがわからないタイトルに微妙な意味を込めたもの場合はそうだ。そこでまずは、タイトルの勉強から。まずラストは、LAST（最後）ではなく LUST（肉欲）で、これは色（欲情）のこと。そしてコーションは CAUTION（警戒、警告）で、戒（戒律）のこと。この2つのキーワードを並べただけのシンプルなタイトル『色、戒』とは、「色の中に戒（戒律）があり、戒の中に色がある」という意味で、人間や人間社会はすべて二律背反だという主張だ。そんなタイトルがいかにこの映画のストーリーとマッチしているかは、2時間38分後にハッキリわかるはず……。

## 舞台は……？ 原作は……？ モデルは……？

1931年の満州事変による日本の中国東北部への侵攻と翌1932年の満州国の建国によって日中関係は急速に悪化した。それが飛び火したのが1937年7月の蘆溝橋事件で、これによってついに日中戦争が開始することになった。この映画導入部の舞台は1938年の香港だが、メインは1940年代の上海。「東洋の摩天楼」といわれた当時の上海は激動の時代の中、各国の権益が渦巻く国際都市だった。そして日中間においては、重慶にある蒋介石の国民党政府と親日の傀儡政権である汪精衛（汪兆銘）政権との対立が大きなテーマ。したがって、そこでくり広げられたスパイ合戦が激しいものだったのは当然だろう。そしてそれは、「東洋のマタ・ハリ」と呼ばれた「男装の麗人」川島芳子の活躍物語と同じように、ある意味で血わき肉躍るもの。この映画の主人公梁朝偉が演ずる易のモデルは、特務機関ジェスフィールド76号の作業員だった丁黙郵。他方湯唯が演ずる王佳芝のモデルは、実在した女スパイで日本人を母に持つ鄭蘋如というわけだ。そしてこの映画の原作となったのは、張愛玲の『ラスト、コーション』だ。ちなみに、劇団四季のミュージカル『異国の丘』（01年）には、近

衛文磨首相の長男近衛文隆が九重秀隆名で登場し、蒋介石政権の司法大臣の娘愛玲と恋におちるが、このストーリーにも現実のモデルがいるようだ。

この映画のプレスシートにある海野弘氏の「女スパイ、上海に消ゆ」の中にはそんな面白いお話がいっぱいあるし、「ラストコーションを良く知るための年表（1918年から45年、鄭蘋如と張愛玲の生きた時代）」からは学ぶべきものがいっぱい。アジア圏のみならずアメリカでもヨーロッパでもこの映画が絶賛されているのは、そんな激動の時代を背景とした面白いストーリーだから。しかし、その楽しみをホントに味わうためにはしっかりお勉強する必要があることも明らかだ。

## ■サークル活動も行きすぎると……？

大体どんな大学でも、演劇部などというサークルは学校の勉強そっちのけで文学に凝り、社会勉強に凝り、その挙げ句頭デッカチとなって「社会に出て実践すべき！」という過激な活動になることが多いもの……？ そんな急進派学生の典型が、演劇部のリーダー鄭裕民（王力宏）。そして、1938年日本軍の侵攻から逃れて本土から香港に集団移住した女子学生、王佳芝（湯唯）を鄭に紹介したのが、王の親友の女子学生ライ・シュウチン（朱芷瑩）だった。反日の芝居を企画実現し、大観衆の愛国心を目覚めさせたのはたしかに彼らの大きな功績だが、あまり有頂天になりすぎると……？ そんな心配をしながら私は彼らの「サークル活動」を見ていたのだが、鄭が次に企画したのは芝居ではなく、特務機関ジェスフィールド76号の幹部である易の暗殺という大それたもの。鄭の幼なじみのツァオ（錢嘉樂）が易の元で働いているという情報を得た鄭は、今や同志となった王とライそしてオウヤン・リンウエン（阮徳鏘）、リャン・ルンション（柯宇綸）、ホァン・レイ（高英軒）の5人とともに、具体的な易暗殺計画を立案した。

映画の冒頭に登場するのは、易夫人（陳冲）、マー夫人、リャン夫人と共に麻雀に興じている若く美しいマイ夫人（湯唯）だが、これは真っ赤な偽者。このマイ夫人こそ、夫が輸出入の仕事に従事していると偽って、易夫人の信頼を獲得した王だった。易暗殺のためには敵の懐深く入り込むことが不可欠。そんな作戦のもとに、王は今マイ夫人として易の邸宅の中に入り込み、易を外に引き出すチャンスをうかがっていたのだった。

しかし、危ない危ない、こんな学生の火遊びは……？

## それから2年後

学生たちの社会的実践＝易の暗殺計画がいかなる結末に至ったかは映画の中で観ていただくとして、スクリーン上は2年後つまり1942年の上海に移る。易は今や悪名高き暗殺組織ジェスフィールド76号のトップとして君臨し、辣腕を振るっていた。他方、王は日本占領下の上海で叔母さんの家に身を寄せながら大学に通っていたが、鄭以下かつての「同志」たちは、今や本格的な抗日分子として活動していた。そこで王を捜しあてた鄭が打ちあげたのが、易暗殺計画への再度のチャレンジ。つまり、再度マイ夫人になりすまして易夫人と連絡をとり、敵の懐深く潜入してほしいということだ。2年前、王は香港でどんな「訓練」をしていたのか……？ また、じっとマイ夫人を見つめる易のまなざしに王は何を感じていたのか……？ そして、今回再びマイ夫人として易宅に潜入すれば、一体どんな事態が予想されるのか……？ 聡明な王にはすべてわかっていたはずだが、意外にスンナリと(?)王は鄭の申し出を承諾することに。

今回は学生のサークル活動の延長ではなく、プロとしての仕事であり、そこでの新しい組織のボスはウー(廣宗華)だった。詳しい任務の打ち合わせをする前にウーから王に与えられたのは、服に縫いつけておくようにと命じられたある小さなカプセル。それは一体ナニ……？ カンのいいあなたなら、すぐにわかるはずだが……。

## R-18 指定の意味をしっかりと確認！

この映画の見どころの1つは激しいセックスシーンと言われていたが、まさにそのとおり。最初のセックスシーンは学生のサークル活動の延長としての「訓練」だから幼稚そのもので、私の目には微笑ましいものだった。しかし、上海で再会した後にやっと実現する易と王との最初のセックスシーンはまるで強姦。名作『イングリッシュ・ペイシエント』(96年)でも、アルマシーとキャサリンとの激しいセックスシーンにビックリしたが、易による殴る、縛るを含む激しい強姦セックス、SMセックス(?)はすごいもの。もっとも、興味本位にそんな「プレイ」を楽しむのは、この映画の見方としてはナンセンス。なぜ、易がそんなセックスを求めたのかについての深い考察が必要だ……。1度目の激しいセックスの後には、2人の爛れるようなセックスシーンが再三登場する。日々極限状況での任務達成を強いられる易が王とのセックス

にのめり込んでいく姿を表現する梁朝偉<sup>トニー・レオン</sup>の演技は鬼気迫るものがあるから、是非それに注目。そしてこれは、私が見てきたこれまでのどんなセックスシーンよりもすごいと実感させられるもの。その特徴は、①まるで性愛の教科書のように複雑に絡まるさまざまな体位、②接合部分丸見えか、というホントにギリギリまでの演技（ひょっとして演技ではない……？）、③王<sup>ワン</sup>からの積極的かつ執拗な易<sup>イー</sup>への性愛攻撃だが、その生ツバもののシーンは是非あなたの目で。

### 鬼の目にも涙……？

易<sup>イー</sup>と王<sup>ワン</sup>との爛れた（？）性愛関係が続く中、突然日本料理店における意外なシーンが登場する。日本支配下の上海の日本料理店だから、日本の将校たちが幅を利かせていたのは当然だが、日本の傀儡政権のために命を懸けて闘っている易<sup>イー</sup>だつてそこに入りする権利があつて当然。というわけではないが、ある話し合いの延長として実現したのがこの日本料理店における易<sup>イー</sup>と王<sup>ワン</sup>とのデート。中国人の易<sup>イー</sup>にしてみれば、座敷に流れてくる下手クソな調子外れの日本の歌を聴いてイライラしていたのは当然だが、そこで「私の方がうまいわ」といいながら、王<sup>ワン</sup>が堂々と歌いかつ踊り始めたからビックリ。これがプレスシートにも歌詞と詳しい解説がついている『天涯歌女』。

この歌は「中国のリリー・マルレーン」と称されている周璇<sup>シュウ・セン</sup>の代表曲とのことから、しっかり勉強し、その重みを確認しなければ……。ここで注目すべきは、王<sup>ワン</sup>のこの歌を1人静かに聴いていた易<sup>イー</sup>の目に涙が溢れ出たこと。さて、彼のこの涙はホンモノ……？

### 女はダイヤに弱い動物……？

「起承転結」というオーソドックスな4分類をすれば、その「転」の部分に相当するのが6カラットのダイヤモンドのお話。梁朝偉<sup>トニー・レオン</sup>扮する易<sup>イー</sup>はダイヤには全く興味はないが、映画の冒頭に登場するマイ夫人以外の3人の熟女たちの指には大粒のダイヤの指輪が光っていた。また、当然その方面の話題に彼女たちは大いに盛りあがっていた。そこで易<sup>イー</sup>が秘かに考えたのは、王<sup>ワン</sup>に対するダイヤのプレゼントらしいが、それがちょっと手の込んだ手口になったから、そのストーリーがこの映画の「転」の役割を見事に果たすことに。ある日王<sup>ワン</sup>が易<sup>イー</sup>から渡されたのは1通の封筒。それを誰にも気づかれないように、ある住所に届けてくれとのことだった。否応なくそれを引き受けた

王<sup>ワン</sup>を迎えたのは、ある宝石商。その主人の言葉は、「代金はすべて処理済みだから、望む商品をどうぞ」ということだったから、王<sup>ワン</sup>はビックリ。とはいっても、やはり女はダイヤモンドに弱い動物（？）だから、うれしいのは当たり前……？

もっとも、王<sup>ワン</sup>はそんなうれしさを押し殺し、完成したダイヤの指輪を受け取りに行くときこそが易<sup>イー</sup>を暗殺する絶好のチャンスだと考え、さまざまな策をめぐらし廓<sup>クワン</sup>たちと連絡をとり、それを実行しようと企んだが……。さあ、こんなスリル満点の「転」の部分の展開もしっかりと……。

### なぜ……？ なぜ……？ なぜ……？

この映画を観ていると、学生時代の出会い当時から一貫して廓<sup>クワン</sup>と王<sup>ワン</sup>が惹かれあってきたことはすぐに理解できる。しかし、廓<sup>クワン</sup>は決してそれを口に出さなかったばかりか、易<sup>イー</sup>暗殺のために王<sup>ワン</sup>が身体を張って易<sup>イー</sup>の懐深く入ることを認めただけか、まだ男を知らない王<sup>ワン</sup>がその「訓練」を受けることさえ容認。一体それはなぜ……？

他方王<sup>ワン</sup>も、廓<sup>クワン</sup>のそんな気持を知りかつ自分の廓<sup>クワン</sup>に対する気持もわかりながら、あえて易<sup>イー</sup>暗殺という自己犠牲的かつ危険いっばいの任務になぜ従事することに……？ その答えはもちろん任務のため、愛国のためということだが、そこにムリがあったことは明らか……？

そんな葛藤を乗り越えて過酷な任務に従事し、強姦まがいの初セックスを契機として易<sup>イー</sup>と王<sup>ワン</sup>の間にはその後濃密なセックス関係が続いていた。しかし、王<sup>ワン</sup>にとってそれは易<sup>イー</sup>暗殺という目的を達成するためのもの。そして、今やつとその千載一遇のチャンスが。すなわち、あれほど用心深かった易<sup>イー</sup>も、さすがに一緒にダイヤの指輪を受け取りに行ってくれと頼まれた時は警戒心を解き、何のガードもないまま王<sup>ワン</sup>と2人で宝石店の中へ。既に王<sup>ワン</sup>からの連絡を受けた同志たちが待ち受けている中へ、易<sup>イー</sup>は王<sup>ワン</sup>と共に無警戒で入ってきたのだから、もはや易<sup>イー</sup>は袋の中のねずみというわけだ。

ところが、そこでとった王<sup>ワン</sup>の行動は……？ それは何と、易<sup>イー</sup>に対して今迫っている危険をわずかにくちびるを動かす中で伝えるものだった。一体それはなぜ……？ 易<sup>イー</sup>との濃密なセックスを続けていく中、いつのまにか王<sup>ワン</sup>の心中には易<sup>イー</sup>への愛が生まれていたの……？ そして、それが暗殺チームへの忠誠心や愛国心よりも優位に立つことになったの……？ これらの、なぜ……？ なぜ……？ なぜ……？ を考えることが、この映画最大のテーマかも……？

## 🎬「結」は……？

この映画の起承転結における「結」の部分がきわめてシンプルだったのは、私にとって少し意外だった。王<sup>ワン</sup>のくちびるの動きによって、一瞬のうちに事態を察知した易<sup>イー</sup>の行動は素早いもの。そんなシーンは是非あなたが目で。

暗殺計画が実行段階で失敗すれば、その企みに関わった人物たちの摘発と逮捕が容易なのは当然。今、執務室の机に1人座る易<sup>イー</sup>の前には、王<sup>ワン</sup>を含む鄺<sup>クワン</sup>たち反日抵抗組織の暗殺団員たちのリストがあった。さて、そこで下された易<sup>イー</sup>の決断とは……？ せめてそれくらいは、ここでネタばらししないでおこう。意外とシンプルだと私が感じたそんなラストは、是非あなた自身の目で……。

## 🎬主演女優賞……？ それとも新人女優賞……？

そんな話題いっぱい映画だが、意外にもこの映画のビッグネームは、重慶にある蒋介石の国民党政府に対する、親日の傀儡政権である汪<sup>ワン</sup>・精<sup>ジン</sup>・衛<sup>ウェイ</sup>（汪兆銘）政権の特務機関ジュスフィールド76号の幹部易<sup>イー</sup>を演ずる梁<sup>リョウ</sup>・朝<sup>チョウ</sup>・偉<sup>エイ</sup>ただ1人。この易と絡むのがマイ夫人だが、これは偽りの姿で、本名は王<sup>ワン</sup>・佳<sup>チヤ</sup>・芝<sup>チー</sup>。そんな抗日の秘密機関の美しき女スパイを演ずる湯<sup>タン</sup>・唯<sup>ウェイ</sup>は、1万人のオーディションから選ばれた新人女優だ。

今や日本はもちろん、世界的に有名になった章<sup>チャン</sup>・子<sup>ツイ</sup>・怡<sup>イー</sup>のデビュー作は『初恋のきた道（我的父親母親）』（00年）だが、あの時の初々しさいっぱい彼女の登場は衝撃だった。しかし、映画初出演とはとても思えない見事な演技と、李<sup>アン</sup>・安<sup>リー</sup>監督が「ゼムクリップのような体位」と表現した露骨で激しいセックスシーンを堂々と演じた湯<sup>タン</sup>・唯<sup>ウェイ</sup>の女優根性はすごいもの。『初恋のきた道』における章<sup>チャン</sup>・子<sup>ツイ</sup>・怡<sup>イー</sup>の出現は、いわば『キューポラのある街』（62年）における吉永小百合のようなものだった（？）が、『ラスト、コーション』における湯<sup>タン</sup>・唯<sup>ウェイ</sup>の出現は、『化身』（86年）でデビューした黒木瞳のようなもの……？ 映画初出演時の黒木瞳の初々しい魅力と美しいヌード姿はそりゃすごいものだった。そういえば、この湯<sup>タン</sup>・唯<sup>ウェイ</sup>の顔は日本でいえば誰に似ているのかなとずっと考えていたが、そこで思いついたのが若き日の紺野美沙子……？ そんな湯<sup>タン</sup>・唯<sup>ウェイ</sup>は金馬獎では新人俳優賞を受賞し、主演女優賞は易<sup>イー</sup>夫人役の陳<sup>チン</sup>・沖<sup>ジョン</sup>にさらわれたが、私は到底それには納得できない。主演女優賞は、当然湯<sup>タン</sup>・唯<sup>ウェイ</sup>でなくちゃ。

2008(平成20)年1月19日記